

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12848

研究課題名（和文）19-20世紀転換期西欧の「大劇場」と「大衆劇場」におけるバレエの諸相

研究課題名（英文）A Study on Ballet in National/Popular Theater in Western Europe at Turn-of-the-century

研究代表者

山田 小夜歌（YAMADA, Sayaka）

京都精華大学・国際文化学部・講師

研究者番号：40825204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19-20世紀転換期西欧における歌劇場などの大劇場とミュージックホールやヴァラエティ劇場など大衆的な劇場双方のバレエとその影響関係に着目し、劇場間の人的流動や作品の伝播、各劇場間における作品の翻案や改訂上演の実態と受容などを、同時期の各地域における社会的、文化的背景に照らしながら多角的に考察した。民衆間の娯楽文化として発展した大衆的な劇場におけるバレエの特徴を浮かび上がらせつつ、それらが西欧の大歌劇場やロシア帝室劇場のバレエとも動的に関連し、相互が入り乱れるかたちで成立し合っていた同時期のバレエ動向の一端を捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

バレエ史における近代フランスから帝政ロシアを経て現代へといたる従来の大劇場を中心とした発展史観論に対し、近年ミュージックホールなど大衆的な劇場のバレエの功績を捉えなおそうとする研究が進められつつある。本研究では、見過ごされがちだった19-20世紀転換期西欧のバレエ動向に着目し、作品内容と上演環境、劇場種や地域の違いによる上演実態と受容の差異など、同時期の多様なバレエのありようを多角的に解明することを試みた。大劇場と大衆的な劇場におけるバレエの関連にも目を向け、従来、高級文化と大衆文化それぞれの担い手として役割を分け合っているかのように見なされてきた両劇場における動的影響関係の側面に光を当てた。

研究成果の概要（英文）：This study focused on ballet in both national theatres, such as opera houses, and popular theatres, such as music halls and variety theatres, in Western Europe at the turn of the 19th to 20th century. It examined the movement of people between these theatres, the dissemination of works and the reality and reception of adapted performances between different theatres while considering the social and cultural backgrounds of various regions during the same period. Through the investigation and analysis of historical materials, I highlighted the characteristics of ballet in popular theatres, which developed as a form of entertainment for the masses. Additionally, I uncovered a particular aspect of the ballet trends of the time, showing that these ballets dynamically interacted with and were mutually influenced by the ballets of Western Europe's national theatres and the Russian Imperial Theatres.

研究分野：舞台芸術

キーワード：バレエ史 上演文化 ミュージックホール ヴァラエティ 歌劇場 劇場文化 ロンドン イタリア

1. 研究開始当初の背景

(1) バレエ史における **19-20 世紀** 転換期の西欧は、ロマン主義バレエ全盛とバレエ・リュス隆盛の狭間にあって、バレエ凋落期と見なされ、従来の舞踊史研究では長らく等閑に付されてきた。近代フランスバレエと帝政ロシア由来のクラシックバレエ、そしてそれらが育まれたパリ・オペラ座、ボリショイ劇場、マリンスキー劇場などのロシア帝室劇場という大劇場にかかる事象を中心としたバレエ史記述が、曖昧にバレエ史のメインストリームとして描かれ、認識されてきたのである。こうしたやや偏向ともいえる舞踊史記述への反省から、近年、ミュージックホールなど大衆的な劇場のバレエを調査してその功績を捉えなおそうとする研究が進められつつある (**Carter : 2005, Pritchard : 2014, Gutsche-Miller : 2015** など)。実際、**19 世紀後半** ~ **20 世紀** 初頭の欧州は多種多様な劇場が乱立し、バレエの上演が行われたのは貴族、上流階級やブルジョワ向けの大劇場に限らず、一般市民に向けて主に娯楽を提供するミュージックホールや演芸場などの大衆劇場もまたバレエ上演の舞台となった。とりわけ、当時最大級の劇場娯楽街として栄えたロンドンのウェストエンドにあったヴァラエティ劇場は、欧州内外からダンサーや振付家を集め、上演演目の中核に据えたバレエ作品が広範な観客層から支持を獲得していた。同時期におけるバレエをはじめとした劇場文化の変化は、新興技術の突出と市民階級の生活文化の変容、それに伴う観客層の多様化といった社会的事情とも無縁ではない。民衆間の娯楽文化として発展した大衆的な劇場におけるバレエと、官営(半官)や帝室劇場で実践されたフランスやロシア由来のバレエとは、作品や上演実態の違いはもとより、社会的・文化的意味においても相当の隔たりが推察され、それぞれのバレエの実態はその背景もあわせて多角的に検証する必要がある。

(2) さらに、例えば英国ロンドンのヴァラエティ劇場についていえば、そのバレエの中心的役割を担った振付家やダンサーはミラノ・スカラ座出身のイタリア人が最も多く、中にはパリ・オペラ座など大歌劇場で主演を務めた舞踊家も含まれるなど、大衆劇場のバレエとはいえ、その水準は大劇場にも肉薄していた可能性を看過すべきではないだろう。ヴァラエティ劇場のバレエ作品には、スカラ座ほかイタリア国内の大劇場で初演・再演された既存作品のアダプテーションと思われるものが多数ある一方で、ヴァラエティ劇場で制作されたバレエ作品がスカラ座等の大劇場に逆輸入されるケースもあり、双方には動的な影響関係があったことが窺える。従来言及されてきたダンサーや振付家といった劇場間の人的流動や作品の伝播、各劇場間におけるアダプト上演の実態と受容などをより精緻に把握し、「大劇場」「大衆劇場」それぞれの運営とバレエ上演・興行のありようを比較検討することで、同時期の西欧における多様なバレエ文化を捉えなおすべきである。

2. 研究の目的

本研究では、**19-20 世紀** 転換期の西欧におけるバレエ、とくにヴァラエティ劇場やミュージックホールなどの大衆劇場を起点とするバレエの性格を多角的に読み解くとともに、同時期の大劇場でのバレエ上演状況や受容との比較分析を行うことで、バレエにおける両劇場の影響関係を明らかにすることを目的とした。さらに、西欧の大衆劇場で展開されたバレエと **19 世紀** フランスやロシア由来のバレエとの差異を明らかにしたうえで、世紀転換期西欧にあったバレエの多様な様相と受容について再評価し、バレエ史上に位置づけることを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、当初、相互の動的な影響関係が示唆されるロンドン、パリ、ミラノの劇場を中心に扱い、具体的な実態の解明を試みることにした。しかし、コロナ禍の中で資料収集のための海外渡航が制限されたことから、インターネットアーカイブなどを通して収集・閲覧可能な資料とすでに手元にある史料をもとに研究を進めざるを得ない状況となった。そこで、過年度までに調査実績と史料蓄積のあるロンドンの大衆的な劇場とミラノ・スカラ座という大劇場に焦点化して分析と考察を行うことにした。

(1) ロンドンのヴァラエティ劇場のバレエ実態調査・分析については、**19 世紀後半** ~ **20 世紀** 初頭における同地のバレエ上演の中心だったアルハンブラ劇場とエンパイア劇場の上演プログラムや各種書簡・文書等膨大な一次資料の分析から、上演演目と振付家、演者などを一覧表化して全体像を把握し、作品内容を検証した。並行して、大衆紙から高級紙まで広く新聞・雑誌記事の収集と分析を進め、ヴァラエティ劇場の社会的位置づけを考察し、同時期ロシアやフランス、イタリアの状況と比較・検討した。

(2) イタリアの大歌劇場ミラノ・スカラ座とロンドンのヴァラエティ劇場との関わりについて

は、過去の調査を通して多くのイタリア人舞踊家がスカラ座とヴァラエティ劇場を行き来していたこと、また上演作品の一部がスカラ座からヴァラエティ劇場へ輸入、あるいは逆にスカラ座へ逆輸入されていた様子が浮かび上がってきた点を踏まえ、本研究ではこれらを具体的に解明するために、世紀転換期のスカラ座におけるバレエ上演実態をより詳細に調査した。さらに、ロンドンの大衆・娯楽的バレエとスカラ座の作品群を比較し、作品と舞踊家の具体的な流動実態を分析した。また、各劇場のあり方や文化的・社会的意義を分析するとともに、相互の影響関係を比較考察した。

4. 研究成果

(1) 劇場間における舞踊家と作品の具体的な流動実態を調査・検証するため、ミラノ・スカラ座とロンドンのヴァラエティ劇場に関する年鑑やプログラム、新聞記事などをもとにバレエ上演の基礎調査を行った。ヴァラエティ劇場のうちアルハンブラ劇場の上演演目と振付家、演者などを一覧化して整理し、とくにイタリアバレエと関連があると考えられるものを抽出した。あわせて、スカラ座のバレエ上演記録の整理も行ったが、同時期イタリアの政治社会状況から劇場の一次閉鎖が相次いでいたこともあり、スカラ座のみの調査ではイタリアの大歌劇場のバレエ動向を把握することは困難であることが判明した。そこで、トリノ、フィレンツェ、ルッカ、ローマ、ナポリなど他都市の歌劇場にも視野を広げてバレエ上演の傾向を捉えることとした。ただし、いずれも収集が叶った資料が限定的なため、以降も引き続き調査・検討を進めていく予定である。

(2) ヴアラエティ劇場のバレエを総覧すると作品の主題やスタイル、趣向の多様さが改めて浮き彫りとなり、個別の上演事例を丹念に調査する必要性が明らかとなった。研究期間中に上演芸術とメディアをテーマとする所属研究所主催国際シンポジウムへの登壇を予定していたため、英国にとって王朝転換期でもあった世紀転換期における政治的・外交的・社会的変容と、表現メディアとしてのヴァラエティ劇場のバレエとの関わりに注目し、作品分析とその受容について考察を行った。本研究の主旨からすると同考察はやや周縁的な主題にもみえるが、大衆向けの劇場とそこでのパフォーマンスが、社会や市民生活の変化に呼応するように変容を遂げていく様子を具体的に捉えることができた。同シンポジウムはコロナ禍により中止となってしまったが、成果は論文「バレエとメディア 英国ミュージックホールにおける「英仏協商」」にまとめ、研究所の学術誌に掲載された。

(3) 上記(2)の考察を通して、世紀末イタリアを代表する振付家ルイージ・マンゾッティの「パッロ・グランデ」作品群、とくに《エクセルシオール》の世界的な展開が、以降の大劇場と大衆的劇場の相互連関をさらに進める契機になったことが示唆された。この仮説を具体的に検証するため、従来の《エクセルシオール》の作品研究およびアダプテーションに係る二次文献を精査した。さらに、同作の英国での翻案上演の実態と受容およびその後の影響について検討した。また、《エクセルシオール》の日本への伝播とアダプテーションについても考察を行い、研究成果の一部を所属学会にて発表した。本研究課題は主に西欧の事象を扱うものだが、この検討を通して、個々のバレエ作品の特色、各種劇場の社会的位置づけ、劇場の存立とそれにかかる上演作品の選定・改訂が、それぞれ相互に関連しつつ展開していく様子的一端を明らかにすることができた。この《エクセルシオール》、またオーストリア＝ハンガリーで初演された《人形の精》のように世紀末以降に世界各地でアダプトされた作品に通底する博覧会、百貨店、宣伝広告といった同時代の風潮を反映したスペクタクル要素にも注目し、上演される劇場の種別あるいは国や地域の違いなどによる翻案や受容のありようについて比較分析を進めた。その成果の一部は、国際会議で発表した。

(4) 先に挙げた作品とは反対に、ミュージックホールなど大衆的な劇場で制作され大劇場へもちこまれた、いわば逆輸入の事例にも注目し、イタリア出身振付家が手掛けたバレエ《日本にて》に関する資料調査をニューヨーク公立図書館(NYPL)で行った。また、過去に実施した調査史料をあらためて整理した結果、英国ヴィクトリア&アルバート博物館所蔵のアルハンブラ劇場関連資料の中には、同作品の他劇場での上演背景に係る事情を捉え得る史料が多数含まれていることもわかった。この《日本にて》の制作と上演に関する調査研究は、同時期の大衆的な劇場と大劇場の動的な関わりをより具体的に把握するための貴重な事例となる。これらについては本研究を引き継ぐ研究課題において検討していく予定である。

(5) 研究期間の最終年度には、本課題が着眼する世紀転換期のバレエをテーマに、ロシア芸術文化を専門とする平野恵美子氏との共同研究として、ヴィクトリア&アルバート博物館ダンス・キュレーターで世界的に著名な舞踊史研究家である **Jane Pritchard** 氏を招き「19-20世紀転換期のバレエと美術・ファッション」と題した講演会を名古屋、東京、京都の3都市で開催した。

レクチャーとディスカッションを通して、世紀転換期西欧のバレエが、都市文化における社会的変容に呼応するように多様化し異種混交な様相を呈していたこと、それらがいわゆる近代フランスバレエやロシアのクラシックバレエのあり様とはかたちを変えつつ繁栄していたこと、また他方で同時期ロシアバレエとも動的なつながりがあったことなどが改めて浮き彫りとなり、貴重な研究交流の機会を提供することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山田 小夜歌	4. 巻 3
2. 論文標題 バレエとメディア 英国ミュージックホールにおける「英仏協商」ー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田オペラ / 音楽劇研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 山田小夜歌
2. 発表標題 19-20世紀転換期のバレエで描かれた日本 英国の事例を中心に
3. 学会等名 早稲田大学 オペラ / 音楽劇研究所 5月研究例会（第219回オペラ研究会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Sayaka YAMADA
2. 発表標題 “Advertisement Ballets” in Taisho Japan and Turn-of-the-Century Western Europe: Focusing on the Attempts of the Ballet Master Rosi
3. 学会等名 New Opera and Music Theatre and Other Issues, Institute for Research in Opera and Music Theatre, Waseda University（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 山田小夜歌
2. 発表標題 大正期帝劇の「19世紀末バレエ」
3. 学会等名 舞踊学会 第74回学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sayaka YAMADA
2. 発表標題 The dawn of ballet in Taisho Japan: Focus on the activities of ballet master G.V.Rosi
3. 学会等名 EAJS 2021, 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田 小夜歌
2. 発表標題 G.V. ローシーの来歴にみる大正期帝劇の舞踊・音楽劇と世紀転換期西欧のパレエ
3. 学会等名 早稲田大学 オペラ/音楽劇研究所 11月研究例会(第191回オペラ研究会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 山田 小夜歌
2. 発表標題 G.V. ローシーの作品創作
3. 学会等名 舞踊学会 第72回学会大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Jane Pritchard氏講演会「19-20世紀転換期のパレエと美術・ファッション / The Changing Face of Dance and Fashion in the Early Twentieth Century」	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------